



サンノゼからのたより

2016-1月



無原罪の聖マリアの祝日

1854年12月8日、教皇ピウス9世は、聖母マリアがその母の胎内にみごもった瞬間から、神からの特別な恩恵によって原罪のけがれを免れていることを教義として定義し、宣言しました。



この教義は創世記の中ですでに意義のあるものとされ、こう記されています。「お前と女の間にはわたしは敵意を置く。」この言葉で聖母マリアの無原罪の御やどりは、わたしたちの始祖であるアダムとイブに知らされたこととなります。そして、人間と蛇との間、つまり、人と悪や死の力との間に葛藤があることを予言したのです。

原罪は神への信頼の欠如によるものでした。蛇に誘惑されたことでアダムは、神は結局のところ、自分の人生から何か大切なものを取り上げてしまっ、自分が自由になることを邪魔しようとする敵対者なのではないかと疑いの念を抱きました。自分が神を無視さえすれば完全に自分自身でいられるのではないか。そうすれば自由を完全に自分のものにすることができると確信したのです。

それ以来原罪に左右され、人は知恵の木から世界を形作る力が得られることを願っています。自身も一人の神となって、父なる神のレベルに引き上げられ、努力次第で死と闇に打ち勝つことのできる力を得たいと願っているのです。あまりあてになるとは思えない愛には頼りたくない。自分自身の知恵だけをより所にするのです。なぜなら人知が力を授けてくれると思うからです。愛ではなく力を得ることで、自分の人生が自由になることを望んでいるのです。やがて人は真実ではなくごまかしを信用し、その人生はむなしさへ、そして死へと沈んでいくことになるのです。

しかし愛は決して私たちが受け身的に頼るようなものではなく、真に生きるために授かった物なのです。人間の自由には制限があります。私たちは自由を人と分かち合うことで手に入れることができます。私たちが自由を生み出すことなどできません。私たちがお互いのために共に正しく生きることのみ、自由は開花するのです。

もし私たちが誠実に自分のことを振り返り、世の中で何が起きているのかよく考えるなら、創世記の物語には始まりの歴史だけでなく、どんな時代の歴史も描かれているのであり、創世記に描かれているような考えからくる一滴の毒を、私たちすべてが身にひそませているのだということを認識する必要があります。



原罪について考えるとき、罪を犯さない人は退屈な人にちががなく、その人生には何かが足りないのではないか、また神に相對してでも、私たちが完全に自分自身であるためには、この自由というものが試金石になりえるのではないか、という疑問も浮かびます。

しかし神に目を向けている人は自由を失うことはなく、また退屈なイエスマンにはなりません。なぜなら神を通して、神とともに真実の自由を、偉大で建設的かつ広がりのある良き自由を見つけることができるからです。

このことを私たちは聖母マリアに認めることができます。マリアは言いました。「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださったからです。今から後、いつの世の人もわたしを幸いな者と言うでしょう、力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。その御名は尊く、その憐れみは代々限りなく、主を畏れる者に及びます。」

聖母マリアは教会における信仰と慈しみの模範です。

いつくしみの聖年であるこの年に、神様のみ恵みが私たちの人生を導き続けてくださるよう、聖母マリアに私たちの苦しみと犠牲、そして希望と未来を託しましょう。アーメン

